

まえがき

著者	加納 弘勝
権利	Copyrights 日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア 経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
シリーズタイトル	研究双書
シリーズ番号	405
雑誌名	中東の民衆と社会意識
ページ	[i]-[iv]
発行年	1991
出版者	アジア経済研究所
URL	http://hdl.handle.net/2344/00013596

まえがき

本書は、1989年度に実施された「地域研究部」研究会、『80年代末期中東イスラム世界の社会意識』の成果を取りまとめたものである。

本書の構成、および各章の主要テーマと社会意識研究の領域区分に関しては、第1章中東地域における社会意識、第3節社会意識の諸層とその研究について、で記している。ここでは、いかなる「期待」と「夢」をもってわたくしたちが本研究会を作り、研究を開始し取りまとめたのかを記すことによって、『80年代末期中東イスラム世界の社会意識』研究会の狙いと研究会委員の共有したいいくつかの視点を記しておきたい。

主査、加納には、第三世界を対象とする地域研究は、第三世界の人々の有する伝統、文化、信念体系、一言でいえば、人々の有する価値観に接近する必要があるように思われた。中東地域を対象として地域研究を進める過程で、包括性と原理性を備えたイスラムの価値観がその属性のゆえに中東地域の人々の意識や行動に包括的で原理的な影響を与えていることに気がつけばつづだけ、中東地域の人々、さらには第三世界の人々の有する価値観に接近する地域研究の必要性を強く感じるようになった。第三世界の人々の価値観、なかでも価値観に秘かに込められ、人々を究極のところ動かしているはずの「夢と希望」に接近してみたいと感じたのである。

地域研究を通して第三世界の人々の「夢と希望」に接近したいと考えることは、大それたことで僭越なこととも思われた。とはいえ、「大それた僭越な課題に次年度の地域研究部の研究会で挑戦してみたい」と打ち明けると、本研究会の委員から快諾を得ることができた。人々の価値観に接近する地域研究の必要性が高いことを、各委員が地域研究者の直感で共感できたためである。また、そうした地域研究を進めない限り、第三世界の「人々の顔がみえ

る地域研究」や「地域の香りのする地域研究」は成立しないことにも共感できたためである。

現在の中東諸国は、ある局面の「末」から別の局面の「始」への過程にある。その過程を経ていかなる「始」が生ずるのか、中東地域に住む人々が「不安と危機」のなかで模索し予知しようとしているように思える。中東地域に住む人々の「不安と危機」を目の当たりに感じると、こうした課題に接近可能かどうかという「不安と危機」を抱きつつも、地域研究者はやはり中東地域の人々の「不安と危機」、「夢と希望」を扱う地域研究を展開すべきであるように思われた。

大それた僭越な課題であっても、第三世界の人々の価値観に焦点を絞った地域研究への挑戦なしには、「人々の顔がみえる地域研究」や「地域の香りのする地域研究」を求めることはできない。こうした中東の人々の「不安と危機」、「夢と希望」を分析しないでは、1980年代の「末」から90年代、あるいは2000年の中東の「始」を見極めることはできないように思われた。

『80年代末期中東イスラム世界の社会意識』をめぐる共同研究を、こうして開始することになった。中東における社会意識を対象とする共同研究は、日本の中東研究ではほぼ初めての試みであったし、また、アジア経済研究所の地域研究としても新しい試みであったと信じている。新しく大それた課題のゆえに、どこから研究を着手していけばよいのかについて研究会委員は深刻に悩みながらも、次の研究会が待ち遠しい、そんな新鮮な研究会を1年間続けることができた。新鮮な研究会が組織できたこと、また、研究会終了後のこれからも、1年間互いに心にかけてきた「種子」がゆっくりとそれぞれのメンバーの中で発芽して徐々に成長することになれば、まとめ役としてはこれほどうれしいことはない。

本研究会は、委員6名の小さめの研究会であった。6名以外には、アジア経済研究所元理事、堀侑、研究会の途中の1989年10月にイランに派遣されることになっていた鈴木均、イエメンの社会変動を研究して戻り分析プロジェクト・チームで活躍している佐藤寛の各氏も加わってそれぞれの地域の実例

を披露し、委員の報告に厳しく批判していただいた。

本研究会は社会意識に関する共同研究を進める上で、2つの有利な点を有していた。

第1の有利な点は、中東地域の研究に欠かせない「宗教意識」に関して、イランとモロッコでそれぞれ長年にわたって「聖者信仰」に関わるフィールド調査の実績をもち、独自の調査データをもっておられた、上岡弘二(東京外国語大学, アジア・アフリカ研究所)と堀内正樹(民族学振興会研究員)の両氏の参加を得られたことである。上岡委員は1989年にも現地を訪れフィールド調査を続けられ、イランから原稿を送っていただいた。また、堀内委員は聖者信仰とその背景に関して、モロッコでも詳細なフィールド調査を終えられて帰国されたばかりであった。

第2の有利な点は、宗教意識だけでなく、もっと現実的な「用具性」(第1章参照)をもち、宗教とは別の軸による「連帯性」を備えた非「宗教意識」に関して、エジプト、パレスチナ、イラクという領域で手堅い研究と鋭い「嗅覚」を有される長沢栄治(地域研究部)、臼杵陽(佐賀大学)、酒井啓子(総合研究部)の各氏の参加を得られたことである。長沢委員は、エジプトの「港湾労働者」という都市住民に関する、詳細なエジプト研究者の社会学調査報告をもとに、社会意識についてきめの細かい読み取りができる状態にあった。臼杵委員は、ヨルダンから戻られた直後で、滞在中のヨルダン人インフォーマントからのパレスチナ人意識の原型に関する聞き取り調査をもっておられ、その聞き取り調査を素材にパレスチナ意識の検討が期待された。酒井委員も、2年にわたるイラク滞在を終えた直後であり、イラン・イラク戦争というまさに危機の中における国家指導者と民衆の社会意識の相互作用を検討するには、最適の位置にあった。

2つの有利な点のもとに、本研究会は研究を進めることができた。こうした有利な点にもかかわらず、まとめ役の力量不足から、中東の社会意識に関する研究として了解可能な成果を提示できたのか、「不安と危機」を感じざるをえないのも事実である。

今後とも、地域研究者としての「夢と希望」をかけた地域研究に、わずか
ずつでも接近したいと願っている。

1991年1月18日 湾岸戦争の「始」の日に

加納 弘勝